

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.26 No.4 April 2025

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



4

CONTENTS

・巻頭言

不幸の扱い方

／井上 昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」(18)

明治 22 年 7 月

／深谷 耕治 2

・ライシテと天理教のフランス布教 (39)

21 世紀のライシテと天理教のフランス布教 ⑨

／藤原 理人 3

・英語文献にみる天理教 (9)

D.C. グリーンの『Tenrikyō』(5)

／尾上 貴行 4

・音のちから—中国古代の^{げんかん}人と音楽 (25)

文物が語る音の世界—阮咸—

／中 純子 5

・ブラジルの宗教的風景 (4)

アメリカ南部人移民の植民地経験①

／中西 光一 6

・おやさと研究所ニュース 7

第 375 回研究報告会 (2 月 14 日) /

2024 年度おやさと研究所 特別講座

「教学と現代」/ 2025 年度公開教学

講座のご案内

巻頭言

不幸の扱い方

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

人類学者のエヴァンス＝プリチャードが 1937 年に著した『アザンデ人の世界—妖術・託宣・呪術』は、中央アフリカに住むアザンデ人の宗教的実践について考察したものである。なかでもよく取り上げられるのが第 1 部第 4 章の「妖術の概念は不運な出来事を説明する」だ。アザンデ人は穀物貯蔵小屋を避暑を兼ねた憩いの場にするところがあるが、その小屋が倒壊して何人かの人が下敷きになったとする。私たちがあれば、小屋は支柱がシロアリに食われて朽ちていたので倒壊したのであり、たまたまそこに居合わせた人は運が悪かったのだと考えるだろう。すなわち、小屋が倒壊した理由(シロアリ)と人がその小屋にいた理由(避暑)を説明することはできるが、なぜその人がいる時に小屋が倒壊したのかは合理的に説明できない。しかし、アザンデの人たちはこの不幸な出来事を妖術(witchcraft)の概念を用いて解釈する。ある人がそこにいた時にかぎって小屋が倒壊したという、偶然という言葉で片付けるしかない不幸な出来事を彼らは“合理的に”説明することができるのである。

妖術をかける人は、生まれながらに自身の腸の突起物(マンガ)に宿るとされる神秘的な力を持っており、その人物が他人を妬んだり、腹を立てたりすると、その力が働き、他人に災いをもたらすとされる。妖術をかけた本人はそのような力を持っている自覚はあるが、自分でその力をコントロールすることはできない。よって、不幸な出来事が起こると託宣(oracle)によってその出来事の原因を作った妖術師が告発されることになる。鶏に毒を飲ませる託宣の場合、毒を飲ませた鶏の反応から妖術の存在や影響について解釈する。一方、妖術をかけたとされる人には自覚症状がないので、託宣の結果が本人に知られるが、それでも妖術が止まらない場合、呪術(magic)によって妖術に対抗する。

妖術の概念に基づく託宣と呪術の実践は

不幸な出来事へのアザンデ人の対処法であり、それは私たちの“科学的な”合理性とは異なるもう 1 つの合理性に基づいてなされるものと言える。不幸や災いを解釈、説明し、対処法を提示するこの文化的枠組みを人類学では災因論と呼び、多くの文化ではそれは宗教の領域に属する。どの文化にもこのような枠組みはあり、例えば、家族(‘ohana)の絆を大切にするハワイにもホオポノポノ(ho‘oponopono)と呼ばれる家族関係の伝統的な修復方法がある。ある人が庭の芝刈りをしている時に釘を踏んづけて大怪我を負ったとする。すると家族全員が集められ、一族の長の指揮のもと、各自がどのような罪を犯したか告白し、悔い改めて互いに許し合うのである。家族全員が本当に許し合うことができれば問題は解決する(怪我が治る)とされる。かつては呪術師のカフナ(kahuna)がホオポノポノにおいて神や祖霊の意図を明らかにして問題解決を提示したりした。だが、今ではホオポノポノはキリスト教化されていて、キリスト教の祈りが唱えられるし、聖書を無作為に開いて目に入った聖句に神意をはかる行為(wehe i ka Paipala; cutting the Bible)も行われる。

アザンデ人であれば鶏を用いた毒託宣によって、ハワイ人であれば聖書を無作為に開くことによって、すなわち何らかの方法で伺いを立てることによって不幸の解釈を行い、理にかなった不幸の対処法(呪術や許し)を実践するわけである。この災因論の枠組みは、伝統宗教にとどまるものではない。例えば、天理教の身上・事情さとしについて考えてみれば、かつては教祖や本席に「おさしづ」を伺っていたのであり、現在であれば天理教の原典に神意をはかり、解決法を探るということを実践しているのである。このように考えれば、天理教の「ほこり」や「いんねん(因縁)」の教理も体系づけられた災因論と考えることができる。